

## 枝権兵衛と七ヶ用水

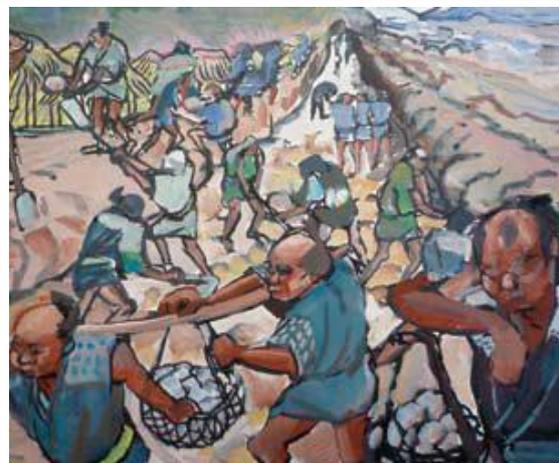
①枝権兵衛は、文化6年（1809年）坂尻村（今の白山市坂尻町）の大きな農家に生まれました。小さい時からなかなかのりこう者で、17才で村の組合頭に、45才で肝煎（村役人の代表者）に選ばれました。また、村を流れる富樫用水の責任者もまかされていたので、村人たちがどんな願いを持っているかも、よく知っていました。



②毎年のように、くり返し起こる洪水や日照り、水不足に苦しむ村人たちを救おうと立ち上がった権兵衛は、「川の水がへっても水を取り入れられ、洪水になってもだいじょうぶな取入れ口は、ないものだろうか。」と、来る日も来る日も手取川の川すじをさがし回りました。そして、ようやく取入れ口にふさわしい場所を見つけました。



③安久<sup>あくど</sup>涛<sup>がぶち</sup>ヶ淵は、今までの取入れ口より、1kmほど上流にあり、日照りが続くいてもまんまと水をたたえている所でした。しかし、権兵衛が立てた計画は、安久涛ヶ淵から九重塔までの約240mのかたい岩をくりぬいてトンネルを通し、鶴来までの残り800mほどに新しく水路をつけるという大工事でした。



④権兵衛は、加賀藩のこやまりょうざえもん小山良左衛門の助けで、藩からゆるしをもらい1865年（慶応元年）から工事を始めました。大勢の村人たち、やとってきた人たちと工事に取りかかりましたが、機械もなく、ツルハシやノミなどの簡単な道具でほり進むのですから、工事はなかなかはかどりません。



⑤そのうち、用水浴いの村々では、「工事をする、と、たたりがある。」とか、「権兵衛は金もうけのためにやっているんじゃないか。」などのうわさが広まりました。また、やとわれた人夫たちなどは、あまりにつらく危険な工事にがまんできず、「もっと、給料を上げろ！」などどさわぎ出し、まったく工事ができなくなってしまいました。



⑥それでも、権兵衛は、くじけませんでした。村の人々に、もう一度、工事の大切さを説いて回り、工事の先頭に立ってはたらき続けました。さらに、工事のお金がなくなると、今度は自分の財産を投げ打ってまで工事を続けました。こうして、工事を始めてから5年目の1869年（明治2年）5月、ついに工事は完成したのです。

